

「北風」その雪の中に消える。——しばらくして、ブウツ、たちあがる。——「北風」のすがたがみえないので、そのまま、魔法の棒を大切にかかえて退場。

(幕)

その四

宿屋。——舞台「その一」に同じ。

午後。

宿屋の亭主。かみさんに「北風」からもらってきた魔法の棒をみせている。

宿屋の亭主 ちよつとみちやアただの棒っ切としかみえないだろう？

宿屋のかみさん そうですわね。

宿屋の亭主 これを、まえの、楡の木植わったところへ植えるんだ。そうするとたちまちこれが楡の木になるんだ。——もとのようなあの楡の木になるんだ。……

宿屋のかみさん ………

宿屋の亭主 うちの庭に、また、もとのように青々した楡の木がうわろうとは、とてもおまえなん

ぞ、想像もしなかったろう？

宿屋のかみさん しませんでしたわ。

宿屋の亭主 しないのがあたりまえだ。——おれだってしなかった。

宿屋のかみさん でも、ほんとうにそれが……？

宿屋の亭主 楡の木になるかというんだろう？

宿屋のかみさん ええ。

宿屋の亭主 おまえはあの(声を小さくして)テーブルかけのことをなぜ思わない？——あのテーブルかけだって、ただみたぶんには、あんなふしぎな働きをしようとはとても思えないじゃあなか。——うちにあるほかの、あたりまえのテーブルかけとちつとも違ったところが無いじゃあないか？

宿屋のかみさん ………

宿屋の亭主 ともにあの北風のくれたものだ。どんなふしぎをみせるかわからない。——おれは、それよりも、きゆうにまた楡の木がはえて、牛のやつがびっくりしなければいいとそれを心配している。

宿屋のかみさん 牛がびっくりして、そのために、お乳でも出なくなったらたいへんです。——うちのくらしの半分は牛乳でもっているんですからね。